

パネルディスカッション 世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」を守り、活かし、そして未来へ

パネラー：中久保 辰夫、下田 一太、中村 俊介

進行：伊藤 聖浩（羽曳野市教育委員会 世界遺産・文化財総合管理室 文化財課）

（伊藤）

皆さん、今日はとても寒い日となりましたが、たくさん来ていただきまして、本当にありがとうございます。私は、羽曳野市教育委員会 世界遺産・文化財総合管理室 文化財課の伊藤聖浩です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。今日の3人の先生方の講演は、いかがだったでしょうか。本当に盛りだくさんの内容で、私はお腹いっぱいになってしまいました。

それでは3人の講師の先生方のお話を受けて、短い時間ですけれども、ディスカッションを始めたいと思います。まずは、今日のシンポジウムのタイトル、「世界遺産「百舌鳥・古市古墳」を守り、活かし、そして未来へ」ということですが、「百舌鳥・古市古墳群」の魅力、あるいは価値やその意義について、まずはそこを押さえて、それぞれの先生方のご意見を聞いていきたいと思います。

下田先生のお話でOUVという言葉が出てきましたけれども、その意味の解説も合わせて、下田先生に口火を切っていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

（下田）

はい。百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録されましたのは2019年で、私自身は2016年からこの推薦に携わる機会をいただきました。私が携わる時点では、もうある程度、百舌鳥・古市古墳群の世界遺産の価値は、それまでの積み重ねられた議論の中で定まっていて、ほぼ最終段階での検討に加わったという形がありました。

皆さんもご存知のように、この世界遺産はシリアルプロパティということで、複数の構成資産からなるわけです。この百舌鳥・古市古墳群は49の構成資産からなっています。おそらく、日本で一番多い構成資産になるかと思います。たくさんの資産からなっているという、多様な古墳の群としての存在や配置が、重要な価値を形成しています。



パネルディスカッション「世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」
を守り、活かし、そして未来へ」

推薦書を検討していく中でも、どの古墳を構成資産にするべきなのか、という点が、長い間議論の中心となりました。ご存知のように、日本全国には 20 万基もの古墳があると言われている中で、日本の古墳文化を伝える古墳、つまり世界遺産としての価値を伝える古墳というのは、どれなのか。そこの議論が、世界遺産の価値の議論と常に深くかかわっていたように思います。

日本の古墳は、大小さまざまありますが、規格、形としての決まりがあって、中心となる古墳に、陪塚ばいづかという附属する古墳がついていることもあります。そういうたった当時の社会ですとか、政治の構造を古墳から推測することができるので、こうした古墳から、政治、社会的な様相を理解できる点が非常に重要な特徴です。ただ、それを示すにあたって、ここはヤマト王権の中心地であったと思われますが、その他に地方の古墳まで広く含めて構成資産にするというような案も、ありましたわけですね。日本全国の古墳によって、日本の古墳の総体的な価値を伝えるということが、一つ理想としてはありましたと思いますけれども、現実的に多くの自治体で協力をして、同じ方法や考え方のもとに保存して、そのための環境を整えるのは難しい。こうした中で、ある程度まとまりのある、それもヤマト王権の中心にある古墳ということで、この百舌鳥・古市古墳群が古墳を代表する存在として選定されることになります。

百舌鳥・古市古墳群の中にも、築造当初は 200 基以上、現在は 89 基もの古墳が残っています。その中で、結果的に 49 基の古墳となりましたが、どれにするかというのが非常に難しい問題で、価値の問題と直結していたと思います。外国から専門家をお呼びして、どうしたらいいか、とご意見を伺うこともありました。「世界で一番大きい古墳一つ選べば、間違いなく世界遺産になりますよ」という意見や、「世界で一番と二番。応神天皇陵古墳も含めて、2 基の古墳が良いのではないか」といった意見をおっしゃる方もいました。

ただ、日本の考古学研究の蓄積の上で明らかになっている、古墳から、社会、政治というものが見えてくるという点を示すためには、どの古墳が必要なのかというようなことの議論になり、この古墳群の 89 の中から選ぶという形で検討が進みました。現実として保存状況があまりよくないとか、周辺に住宅地が迫っているとか、高い建物があるとか、そういう条件を踏まえて、49 基が最終的には選定されました。これらの古墳の中で示せる価値は何か、という枠組みで議論をすることに対して、おそらく考古学を専門とされている先生方の中では、忸怩じくじたる思いを持たれた方もいらっしゃったのではないか、とは思います。

世界遺産になったものと、なっていないものの間で、何となく価値の格差があるみたいな誤解が生じないか、という懸念もありました。実際、他の日本の国内の世界遺産でも、本来は同等な価値を持っているはずなのに、世界遺産として登録されたかどうかで、こうした勝ち



下田 一太 氏

組、負け組みたいなものも出てきてしまう。世界遺産にするためには、わかりやすい説明にするために、価値も絞り込むし、構成資産も絞り込む。絞り込むことによって、本当に本来重要なものが省かれてしまう、ということもあると思います。しかし、世界遺産に登録された後は、構成資産にならなかったものも含めて、一体としてすべてが重要だということをうまく伝えていく、ということが必要だと思います。ここ「百舌鳥・古市」で、世界遺産にならなかつたものも一緒に見ていただく、それからここに来た人が、今度は日本国内の他の古墳を見て、これと一体になっている価値とは何かというのを学んでいただく窓口、きっかけになる。そういうふうな形で、この価値というのが、世界遺産のOUVという限定されたものから、もつとその周辺の広いところに広がっていくといいな、と思います。

(伊藤)

はい。ありがとうございます。世界遺産になった古墳とならなかつた古墳というのも、下田先生に言及していただきました。百舌鳥古墳群や古市古墳群の中には、世界遺産の構成資産とそうでない古墳とがあります。それらの古墳について、価値が高い低いという話になってしまふんですけども、決してそうじゃない。同じ古墳群の中に造られて、もちろん相互に有機的な関係が持つて造られているわけですから、同じく重要な歴史的な遺産ということで、守っていかなければならぬのかなと思っています。

それでは、古市古墳群や百舌鳥古墳群は古墳がメインですので、考古学あるいは歴史学の視点から、その魅力、価値、意義について、中久保先生にお話しいただければと思います。

(中久保)

下田先生から、お話をいただいた話とも少し重複する部分も、あるかもしれません。日本の古墳文化について調べていけばいくほど、世界のさまざまなお墓と比べると、かなり独自なところがあるということもわかって参りました。日本の古墳の特徴というのは、大・中・小、さまざまなサイズがあって、それがそれぞれに意味を持って、地上に記念物として遺された。こうした歴史があるというのが、日本列島の歴史の中で非常に重要である、ということも明確になってきました。

私はひねくれものですから、小さな古墳のほうが好きでして、小さいほうが意外と情報があると思っています。自分たちの街に、もしかしたら小さな古墳が足元に眠っているかもしれないということを知っていることが、遺跡保護につながるだろうと思うからです。

日本の古墳文化の歴史的な価値というのは、秩序ある多様性があるということです。さまざ



中久保 辰夫 氏

まな形状とさまざまなサイズが、一見秩序がないように見えるんだけども、そこには一つのルールがある。そして日本の古代国家が形成されていく中で、政治的な身分秩序を示した、統治のための墳丘墓築造というところが、歴史的な価値だと思います。

古いことわざで、「蓋棺事定」^{がいかんじてい}といって、棺の蓋を閉めて、物事が定まるという言葉があるそうです。その人物の評価^{ひやく}というのは、埋葬するときに、棺を閉じるときに、その人がどうあつたのかということを知ることができるんだという、そういう言葉だそうです。まさに、日本の古墳文化^{こふんぶつ}というのは、有力者が亡くなつて、墳丘を造つて、埋葬し、古墳が完成したときに、その人物の政治身分的な評価が定まつた、そういう時代でもあります。今となっては、古墳時代^{こふんじだい}という時代、その古墳を築造した地域の評価が、墳墓を通じてわかる。これが歴史的な価値になると思います。

ただ、これは歴史的な価値でありまして、世界文化遺産^{せかくぶついさん}というのは、歴史的な価値というより文化的な価値が重要です。我々、日本の考古学者は、主に歴史的な評価をしてきたわけですから、今後はいろんな世界各地と比べたときの、日本独自の文化的な価値、さらには墳丘墓の土製構築物の芸術的な価値、建築学的な価値など、さまざまな価値づけを改めて行っていかないとも感じています。以上になります。

(伊藤)

はい。ありがとうございます。本日講演のトップバッターの中久保先生のお話、スライドでもご紹介いただきましたが、ヨーロッパの墳丘墓のことの説明がありました。マウンドを持つお墓のことを墳丘墓と呼んだりしています。日本の「古墳」というのは、学術的に意味を持たせて、日本独自で使う言葉だ、と私は思っているんですね。大きなマウンドを持った墓というのは、実は縄文時代にもあります、またいわゆる「古墳」が造られなくなつてからも、このようなマウンドを持ったお墓というのはあるんですね。それらと区別するために、考古学では古墳の代表である前方後円墳との関係を考えているわけです。前方後円墳は、3世紀の半ばから6世紀の終わりぐらいまで造られるわけです。前方後円墳が消滅した後も、墳丘を持ったお墓はもうちょっと後まで残つて、それでも7世紀のいっぱいまでぐらい、8世紀の初めぐらいまでですかね。例えば、奈良県明日香村の高松塚古墳とかキトラ古墳は、それぐらいの時期だと思います。今の考古学では、そのように時期を限つて「古墳」と呼んでいます。

マウンドを持った、土を盛つたお墓なことを、一般的に墳丘墓という言い方をしていて、中久保先生のタイトルは、そういう意味もあったのかなと思っています。中久保先生には、ヨーロッパの墳丘墓とか、あるいは中国の漢の皇帝のお墓などの紹介をしていただいたかと思います。私も地元の古墳のことを勉強していくつて、大きな古墳の周りに小さな古墳が附属するといいますか、接近して存在する、陪塚^{ばいちょう}あるいは陪冢と呼びますが、これは日本の古墳では特に5世紀代の古墳によく見られます。それが海外にも、例えば中国にも存在するというのを聞いて、びっくりしたんですね。そういうもんなんだと思って、やっぱり海外と日本の事例を比較するというのが大事なんだというのを思った次第です。中久保先生、ありがとうございます。

それでは中村先生は新聞記者ですので、ジャーナリストの視点から、「百舌鳥・古市古墳群」の価値、意義や魅力をお話していただければと思います。

(中村)

はい。ジャーナリストの視点っていうのはなかなか難しいなと思うんですけど。本当に一般的な、市民の目線ということだと思います。

私ね、3年前に百舌鳥・古市古墳群がちょうど登録されるときの年の春に来たんですね、大阪に赴任したんですね。それで、まず最初に何やるかと、それは百舌鳥・古市古墳群が世界遺産として今年登録の審議がされるからということがもう頭の中にありましたので、仁徳さんのところのレンタサイクルで自転車を借りて、自転車、電動付きにするか、しないか、大分悩んで、自分の足を信じたら、もうすごく後悔した覚えがあるんですけどもね。とにかくチャリンコを借りて、この百舌鳥・古市を可能な限り、走り回りました。

当然、応神さん、仁徳さん、ああ大きなと思いました。中には入れないけど、大きいなと感動しました。そして例えば、古室山とかは本当に綺麗に整備されて、皆さんお弁当食べているんですよね、家族が。これもいいねと思いました。あと、確か、もっとたくさん小さいのがあるはずだと思ったんですよね。さっき下田さんの話があったようにいろんな種類がある。中久保さんもおっしゃいましたね。多種多様である。小さい古墳は一体どれか、なかなかわからないんです。ひょっとしたらこれかなど、家の裏にある里山みたいなもんだよねと、これも古墳かなど。地図を見ると、これも古墳。藤井寺の近くに行くと公園がありました。何か小山のようなところで、みんな子どもたちが走り回って遊んでいるんですよね。こんなところに公園があるんだねと思ったら、これがまた古墳なんですね、遊び場になっている。

つまり、先ほどの特徴というのもありましたけれども、古墳らしい、世界遺産らしい世界遺産、古墳はもちろんたくさんあるんですけど、すっかり地元に密着して、その市民生活の中に溶け込んでいるような、小さな小さな古墳、もうこれ歴史遺産かと思うようなものまで包含している。このギャップと言ったらおかしいですけれども、バラエティーの豊かさ。この特徴に、何か私はショックじゃないですけどもね、感銘を受けました。ああこんなものまでという感じですかね。つまり、歴史遺産というのは、本当地元に溶け込んでいて、初めてと言いましょうか、価値というのがわかるもんなんだな、と思いました。これは、仁徳天皇陵にしても、応神天皇陵にしても、例えば、濠の水は、これまで実際に灌漑用水にも使われてきましたし、木々はたき火の原料、薪の原料とかにもされてきました。つまり、地元の人たちと密着して生



中村 俊介 氏

きてきたんですね。地元の暮らしの中に重要なならば、それを守っていかなくちゃいけないというような、コミュニティーの、だから大事にするんだ、という意識があったと思います。もちろん、律令制下の延喜式とか、そういう法律的なものでも最初のうちは守られてきましたけれども、それから後世になると、社会、地域社会が守ってきた。それが、一番如実に見えるのが、この古市古墳群や百舌鳥古墳群のような気がしてなりません。それが、今の質問で言う、私にとっての、ある意味、ジャーナリストというよりも、私にとっての、この古墳の価値のように思います。

それともう一つ、先ほど下田さんがランキングの問題もおっしゃいましたね。私も、これは常に考えてきたところなんですね。つまり、世界遺産がトップとして、そして国宝とか重要文化財、国内の制度があって、そしてそれ以外。世界遺産になったら、それ以外にならなかつたものは、価値がないのか、そういうランキングというか、線引きが行われてしまうんじゃないのか。もしそうだとするならば、ならなかつたら、うちの財産には何の価値もないよ、というような思いを起こしてしまうとするならば、世界遺産というのは果たしていいものなのだろうか、というふうに、かつて考えたこともあります。このようなランキング、制度上できるのは、しょうがないかもしれません。私、こう考えるようになりました。世界遺産があるんだったら、ユネスコの世界遺産がある。そして、その下と言っちゃうとおかしいですけど、国内の文化財保護法の中での文化財というものがあって、そしてさらに地元の人たちが守るものがある。これは、どんなに制度が違っても、自分たちの、人類の宝、共通のもの、財産を、歴史遺産を守ろうという目的は一緒なわけですよね。ならば、これをすべて包含するような、一つのものとして考えればいい。世界遺産にはなれなかつたけども、そのなれなかつた部分、じゃあ国内遺産で補完しようとかね、いい上下関係ではなくて、そのように一体的にとらえて、初めて広い面的な保護というのができるんじゃないのかな、と思いました。しかも、これは世界遺産のユネスコの作業指針の中にも、あるいはこのほど改正された文化財保護法の中にも、これから地域の力というものをどんどん活用していくなければ、皆さんに手伝ってもらわなければ、歴史遺産というのは守れないということが、そういう流れになりつつあります。ですので、すべて世界遺産も、国内文化財も、地元の小さな小さな村の祠ほこらとか、神社とか、鎮守ちんじゆの神様とか、それも含めて有機的に結びつけながら守るという視点がこれから大事になっていくんじゃないのかな、というふうに思います。以上です。

(伊藤)

はい。ありがとうございます。そうですね、中村先生が言うように、文化財保護、あるいは世界遺産もそのように考えなくてはならないのかもしれません。文化財の保護については、2019年でしたか、文化財保護法が改正されました。今までではどちらかといえば、保存に力を入れてきて、それに軸足を置いてやっていこうという姿勢だったんですね。ところが、この改正で活用のほうも重視しようということになりました。その中で、文化財を守っていく主体、それは、もう地域の皆さんで総がかりで守っていこうということも、うたわれていたように思

います。これから日本の人口も、もうピークを過ぎて減っていっているということですね。これから人口も減っていくということなら、今まで通りの保護のあり方とか保存のあり方とか、そういうのを今少し見直していかなければいけない、というふうに思っています。今の中村先生のお話を聞いていて、やっぱり切実な問題かな、というふうに思いました。

それでは、保存とか保護の話が出ましたが、保存のあり方、とりわけ整備のことですね、あるいはその一つの方法である復元について、今日も下田先生のお話にありましたが、そのことについて議論していきたいと思います。史跡の整備、あるいは文化財の整備というのは、日本では文化庁がマニュアル、手引きを作っていて、それに即して、整備をしたり、復元をしたりということをやっているんですね。しかし、世界遺産の構成資産については、そのマニュアルを参考に整備を検討するのですが、自由にできないというか、従前の通りにできないというのがあるんですね。

世界遺産というのは、先ほど下田先生のお話にあったように、OUV、顕著な普遍的な価値が、大事なんだということですね。それを担保する真実性、オリジナルのもので造られているんだということ、それが大事であると言われているんですね。例えば、そこに階段をつけたりとか、土を盛って形を変えてしまったりというのができない、ということもあるんですね。

そういう世界遺産としての整備のあり方、あるいは整備の一つの方法である復元について、下田先生から先ほどお話をいただきました。ちょうどこの会場である LIC はびきののすぐ南側に、峯ヶ塚古墳という古墳があります。この古墳は、世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の構成資産です。1週間前に発掘現場を公開したんですね。発掘調査の現場を、多くの皆さんにじかに見ていただいたんですね。今日みたいな寒い日ではなくて、大変暖かくて気持ちのいい日でしたので、総勢でおそらく 700 人ぐらいの方が見に来られたんですね。また、地元の小学生、あるいはその教員の方も来られて、数百人の、児童とか生徒の皆さんに見ていただいたというふうに聞いています。その峯ヶ塚古墳を発掘している理由というのは、この古墳を整備していくこうということです。復元も視野に入れようということで、発掘調査をやっているんですね。こういった世界遺産の整備、あるいは復元に関連して、下田先生に、世界遺産における復元の経緯とか、課題について、もう少し詳しくお話をいただければと思っています。よろしくお願ひします。

(下田)

はい。先ほどの報告の中でも少しお話をしましたが、最後はちょっと尻切れトンボみたいな



峯ヶ塚古墳発掘調査 現地説明会

(2021年12月11日)

形で終わってしまいました。整備復元について、今、伊藤さんからもお話ありましたように、世界遺産になって、日本におけるこれまでやってきた方法というのがそのままは通用しないというか、もう一つ別のスタンダードに切り換えていく、あるいはそれも視野に入れて両方に説明がつくようになることが必要になると思います。

今日、最初に私のスライドでいくつかの復元事例、大阪城も含めて見ていただきましたように、国内ではさまざまな歴史的な建造物等は復元されて、遺産の価値を伝える上で非常に効果があると思っています。教育的な効果もありますし、更地になっているところでは理解できないものが見えてくることで、体験として感じができるようになります。

ただ、基本的にユネスコ世界遺産においては、現状を維持するというのが保護のための基本方針となっています。^{プリザヴェーション}Preservation、現状を維持するという考え方方がベースにあるというのは、基本的にヨーロッパの石の文化が大きく影響していると思います。石そのものはなかなか朽ちることはない。石造建造物というのは壊れても、その周りに石のブロックが散乱して残るわけですね。ですので、修理するといえば、落ちている石材を元に戻す。アナスティローシスと言いますけれども、それが修理で、それが正しい、真実性のある修理だというふうに考えられていきました。そういう歴史的な理解があって、ベニス憲章をはじめとする国際的な憲章などで、そういうことが説明されてくるわけです。ただ一方で、日本のように朽ちてしまう木の文化、あるいは残っているのは地面、あるいは土だけといった中では、そういう方法では遺跡の価値や遺産の価値を伝えられない。

そういう中で、日本独自に、あるいは東アジアとして、そういう復元という行為をこれまで開発して蓄積をしてきた経緯があります。ですので、古墳群を世界遺産に推薦するにあたって、こうした手法や考え方を海外に積極的に説明するという手もあったかと思います。しかし、まずは世界遺産に登録するというのが至上命題としてある中で、その議論でぶつかるのは避けたいというのがあって、まずは Preservation という方針で説明してきたというのが現実だと思います。

ただ、日本の復元を伴う整備というのは、さまざまな効果がある。教育的な効果もありますし、物として造ることによって、わかってくることもたくさんあるわけですね。復元的工事を行うためにはさまざまな研究が必要ですし、実験考古学によって理解されることもある。また、日本の復元では、必ず土の遺構部分を保存して、その上に土を盛って上物を復元するわけですから、オリジナルな遺構そのものは、Preservationされるわけです。

そういう条件をしっかりと国際的に説明して、日本としての復元の効果、意義をしっかりと説明しながら、理解を得ていくということが、今後必要になるかなと思います。そこで、世界遺産として墳丘そのものが復元されても意味があるんだということをどう伝えられるかということが、鍵になってくると思います。今日、中久保先生からお話がありましたように、墳丘は Stage、ステージなんですよね。ですので、ステージに人が乗って、そこで行為をするということ自体が古墳の価値の一つで、そこから物を見て、その上に乗っている人を下から見上げる、それ 자체が古墳の一つの価値だと思います。そういう場を造るということは、その世界

遺産としての価値をちゃんと伝えていく上でも必要だという、説明はできるのではないかと思います。

(伊藤)

はい。ありがとうございます。今のお話聞いていて、私もなるほどと思いました。そうですね、近つ飛鳥博物館に仁徳天皇陵古墳の模型が置いてあって、あれを見れば当時の古墳の姿がよくわかると思うんですね。また、今日の先生方のスライドをあったと思うんですけども、兵庫県の五色塚古墳ですね。五色塚古墳に行けば、今、復元をしていますので、当時の古墳の一定の姿が理解できる。墳丘斜面に石が張り詰めてあって、それで平らな面は埴輪が置いてあって、そこにも石が敷かれて、というイメージですね。また、そういう埴輪とか、石だけじゃなくて、ひょっとしたら木製の構造物みたいなものもあって、それが立ち並んでいた可能性もあるんですね。実際にそういうものが確認されている例もあります。墳丘の上は、非常にぎやかな状態であったのではと思うのですが、そこで被葬者に対する祭祀をしているんですね。だから、古墳の復元を行う際にも、人が墳丘に上がることができて、下からも墳丘上を臨むことができて、当時はこういう姿だったんだ、というのがわかるというのは、なるほど古墳の価値の理解が進むなと思って聞いていました。私には、ちょっとそういう発想がありませんでした。勉強なりました。

中久保先生は考古学のご専攻なので、考古学的な遺跡全般ですね、古墳にとらわれず、考古学的な遺跡の復元とか整備の意味やメリットについて、幅広くいろいろな意味で、もしお考えやご意見があれば、お話をいただければと思います。

(中久保)

私は、考古学的な遺跡の復元整備は、発掘調査によってさまざまな遺跡情報を獲得し、できる限り当時の状況が適切に復元されることが大切と考えます。そして、保存と復元がなされ、それを教育的に、地域の社会学習の場として活用されるというのが、やはり本義であると思います。日本各地で史跡整備がなされてきた事例の蓄積を基礎に整備がなされていく。これが、やはりあるべき姿であり、模範的な回答だと思うんです。

他市の事例になって大変恐縮なんですけど、最近の史跡整備でありますと、高槻市の今城塚古墳や安満遺跡の整備が、新しい形の活用のあり方と思っています。皆さんには、ぜひ平日の夕方に行っていただきたい



今城塚古墳公園の復元埴輪で遊ぶ子どもたち（高槻市提供）



弥生時代の遺跡を整備した安満遺跡公園（高槻市提供）

が走り回れる空間がないことが一つの原因になっていると伺いました。一方で、史跡公園は非常に広いので、十分に走り回って、またはゆっくり座って、落ち着いて、さまざまな活動ができるということです。ファミリー層にとって、子どもたちにとって、遊び場としての価値、くつろげる場所としての価値というのも、広大な史跡公園だからこそ生まれる価値になると思います。史跡整備に関しては、学術的な調査に基づく復元整備のあり方に加えて、住民にとって価値がある、そういう整備のあり方というのを考えていく必要があると考えます。個人的には、峯ヶ塚古墳の公園で、そういう世界が広がっていくと良いと期待します。以上です。

（伊藤）

はい。ありがとうございます。今、峯ヶ塚古墳のことも触れていただいたんですけども、古墳の周辺は峰塚公園といって、広大な公園になっているんですね。そこには、やっぱり休みの日とかは、ご年配の方もウォーキングとかジョギングをされたりとか、あるいはファミリー層、ご家族連れで遊びに来たり、そういうシチュエーションはありますね。確かに史跡地の広いところで、ゆっくりとくつろいで、いろんな楽しみ方、あるいは活動ができるといった価値があるんだなど、住民の方々にとってさまざまな価値があるんだというご意見を興味深く聞かせていただききました。

それでは、次に中村先生には、取材等で海外の世界遺産、あるいは歴史遺産の整備の事例、あるいは活用事例なんかをご覧になられていると思います。海外の整備事例、あるいは活用事例について興味深い事例があれば教えていただければと思います。

（中村）

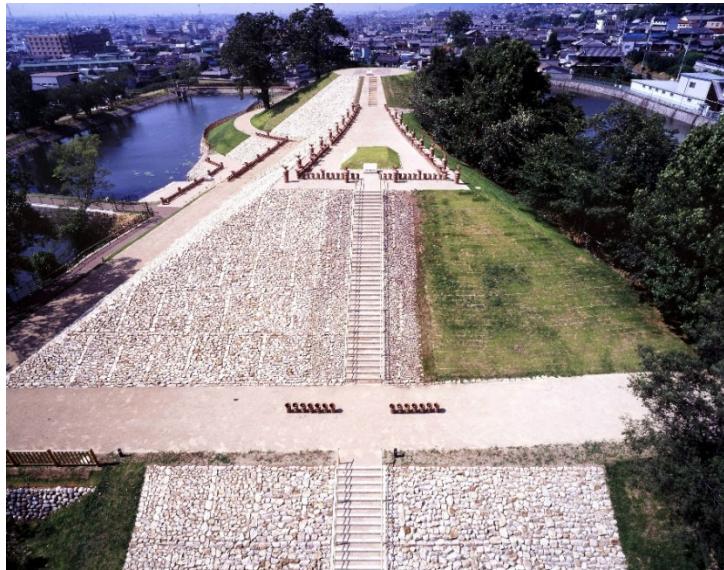
はい。整備はね、いろんなその資産、特に、本当に独特に特徴ある活用のやり方をやっていきますので、なかなか一概には言えないんですね。

んです。今城塚古墳の公園では、遊びまわっている小学生の姿をみることができます。安満遺跡公園では、中学生や高校生がダンスをしたり、それを動画撮影したりしています。これまでの史跡公園とはちょっと違った、新たな形が生まれつつあります。

「どうして平日の夕方に人が集まるだろう」ということを、市の方に聞いてみたことがあります。すると、高槻市は市街地化が進んで、自転車とか車が怖いので、子どもたち

先ほど、復元の話がありましたよね。この整備の一環として復元というものがあるんですけども、この復元をするというのはなかなか難しいところがありましてね。こういう歴史資産というのは、例えば古墳だってもう1000年、千何百年の歴史があって、いつの時点を復元するのかという問題が常につきまとうんですね。何が正しいっていうものはないんですけども、例えば先ほどのような、これ下田さんのスライドでしたよね、五色塚とか、あるいはナガレ山とか、実は古墳というのは、今はああいう森があって、あれが最も古墳らしいと僕らの感覚ではあるんですけども、古墳が造られた当初はもっと人工的なものだったんですね。石がいっぱい貼ってあって、石でできた、石を貼り付けてできた人工物、それが太陽にきらきら輝いて、というような代物だったと思います。今の、山のような自然の姿と似ても似つかないもの。それをどちらの姿に、今の古墳らしく整備するのか、あるいは当時の、造られた当初に戻すのかというの、やはり議論があって、何が間違い、正しいというわけではないんですけども、それだけの長い長い時間の中で、古墳、一つの古墳をとっても、どんどんどんどん姿を変えていく。その中の、いつの時点を復元するのかというのが常につきまとう問題なんです。

それで、先ほどの神戸の五色塚は、えいやっと、築造当時の、新しい、当初の姿を復元している。これも正しい。先ほどの、ナガレ山、^{うま}鷺見古墳群のナガレ山とか、大阪の八尾ですかね、心合寺山古墳^{し おん じ やま}というのがあるんですけども、それは半分が木々が植わっていて、あの半分は全部この石を張り付けて造っているという、折衷様式になっていますね。こういうのは、いくつか、長野とか、関東のほうにも確かあったと思います。これも、また一つの復元



復元整備された心合寺山古墳（八尾市提供）

の仕方、まあ一気に今までの様子と昔の様子がわかるわけですね。いや、やはり、その里山っぽくしないと駄目だというような復元の仕方もたくさんあります。こういう解答はないものなんですけれども、これはよく悩む、悩ましいところですね。

世界とおっしゃいましたけども、実は例えば先ほどの燃えたノートルダム大聖堂、あれは、昔、もう本当に何世紀もかかって、確かに造っている。ケルンの大聖堂だって、あれは600年ぐらいかかって造っているんじゃないのかな。ものすごい時間をかけて造っていて、その中でいろんなゴシック様式とかロマネスク様式とか、いろんな様式が混ざっているんですね。ノートルダム大聖堂が燃えました。あのときに、一番高いところである塔は、あれはもう落ちたんですけども、あの塔自体は、実は意外と新しくできているんですよね。それで、修復するには、もっと今の修復の仕方でもいいじゃないかという、フランス政府がコンペをやりまして

ね、ガラスで塔を造るとかいう案も出たようです。いやいや、元の通りにするべきだっていう案も、もちろんありました。結局、元のような、焼けた当時の形にすることになったようなんです。

時間によっても、いつの段階、今の段階で新しいものを造っても、例えばルーブル美術館の中には、あの宮殿の中に三角形のガラスの造形物がありますが、あの下にチケット売り場があるんですけれども、あれ最初はものすごく…、この間亡くなったデザイナーが造った、建築家が造ったんじゃなかったですかね。あれも不評だったんですけども、実は、今だとルーブルってそんなもんだよね、というガラスのピラミッドがある、真ん中にあるよね、というような、何か妙に馴染んできたり、そういう時間の、なかなか難しさもあります。

あとはワルシャワだって、世界遺産なんです。ポーランドの首都であるワルシャワも、全部、空襲で全部やられたんですけども、あそこは正確な図面があって、それを一からやり直した。オリジナルはおそらくないと思いますけれども、オリジナル通りに復元した。その努力というのが一つの世界遺産の価値になっています。さっきの最後のバーミヤン、あれは仏像がなくなっちゃったんですけども、結局その仏像をもう一回造り直すか、それともそのままにして負の遺産として後世まで伝えていくか、ここでもやはり議論が分かれています。

つまり、繰り返し申し上げますように、復元するということは、それだけのいろんな賛否両論があって、何が正しいのか、正しくないのか、結論のないような、非常に難しい問題なんですけれども、結局はですね、地元地元という今日はお話が出ていますけれども、やはりそれを守ってきた地域コミュニティーの判断というのも、非常に重んじられるようなことになりますね。ですから、さっきのバーミヤンもね、意外と地元では、大仏を復元して欲しいという声がありますので、今こういう状況にアフガニスタンはなっていますけれども、どうなっていくんでしょうね。

ちょっと質問の趣旨とは少し変わりましたけれども、復元ということを、お二方の先生方のお話を聞いていて、ちょっと思ったことを申し上げました。

(伊藤)

ありがとうございます。復元については、やっぱり大変難しい問題だと私も思いました。今の古墳の現状が、やっぱり私たちが見ている古墳の姿になりますので、それを当時の姿、人工的な、いかにも人が造りました、という姿に戻すのがいいのか、あるいは里山というか、樹木が生い茂った姿がいいのかというのは、意見の分かれところで、これからもいろいろな議論を重ねていって、より良い整備の方法、あるいは復元の方法を考えていくことができたらいいなと思っています。ただ、大変難しい問題だなというのは改めて認識させられました。

それでは、時間も無くなってきたのですが、最後の話題に入りたいと思います。世界遺産の活用や継承、次世代に残していくということについてです。私たちの住んでいる、このまちのまちづくり、あるいはひとづくりにとって、世界遺産が果たす役割、あるいはその効果、またどういった役割、あるいは意味があるのか、というのを考えていきたいと思っています。

よく言われることは、世界遺産になったんだから、人がたくさん来て、観光的にも、経済的にも潤ってということで、やっぱりたくさんの人を来ていただきたい、という考え方もあるかと思います。でも、課題がないわけではないんですね。そのあたりについて、先生方一人ずつ、お話を聞いていければと思っております。中久保先生からよろしくお願ひします。

(中久保)

そうですね。まちづくり、ひとづくりにとって、世界遺産が果たす役割ということですが、こと世界遺産は、観光的ないし経済的な視点がよく言われて、それが対立を生んだり、課題があつたりする。このことは、中村先生のおっしゃる通りだと思います。

ここで私が皆さんにお話したいのは、ぜひこの世界遺産の価値づけについて、福祉の観点から考えていただきたいと思っています。そのことが、羽曳野市民でよかったな、羽曳野に生まれて育ってよかったなという、遺産の活用につながればというふうに思っております。

福祉というと、非常に広い概念じゃないか、というふうになりますけど、他市でこれから取り組まれていることで言いますと、例えば、コミュニティバスを活用するというのがあります（『明石市文化財保存活用地域計画』）。古市古墳群は非常に広いですので、一つ一つの古墳を歩くのには、なかなか距離があつたりとか、なかなか体力がないとしんどいところもあります。しかし、コミュニティバスの路線を古墳の周りを通るようにするとか、駅に向かうようになると、市民にとって便利なものにする。他の市では、古い街並みや資料館などをつなげて、そういうことから計画を立てている。羽曳野市の場合は、例えばバス停の名前を「峯ヶ塚古墳前」とかにするなど、できるところから始めていくことが大切です。

健康という面では、こんだごひょくやま 舞田御廟山古墳（応神天皇陵古墳）を一周すると、これはもう20分以上かかりますので、有酸素運動になるわけですね。私も、運動しないといけないので、こういう発想になります。非常にいいウォーキングコースです。小学校とか中学校は、マラソンコースにすることもできるかもしれません。ウォーキングコースにするには、道路を安全したほうがいいですし、お住まいの方の迷惑にならないようにしたほうがいいと思います。車や自転車も気になりますし、少し休憩するようなベンチなどがあったほうがいいかもしれませんし、こういったことには、やはりお金がかかってくるわけです。そうしたとき、文化財保護に関するお金では足りないとなる。福祉と文化財をつなげていって、文化財以外のところから、そういう補助が得られるようにすると、といった形のまちづくりができるんじゃないかなという、そういう話です。

「文化芸術基本法」という法律があります。議員立法になります。その第2条第10項に、「文化芸術に関する施策の推進に当たっては、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが重要であることに鑑み^{かんび}、文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない」とあります。こう

いう法律を活かせば、人材育成、学校教育、文化開発、文化観光開発、社会文化発展をマスタートップにした、そういった連携が組めるんじゃないかなっていうふうにも考えております。

ぜひ、世界文化遺産を福祉の観点から活かしていく。長寿大国日本だからこそ、世界に発信できる価値になるかもしれない。古墳ウォーキングをして、羽曳野市の方は、大阪の中でも特に健康的で長生きされているなというような、そういったこともできてきてもいいのかな、というふうに考えておるところです。少し長くなつて恐縮です。

(伊藤)

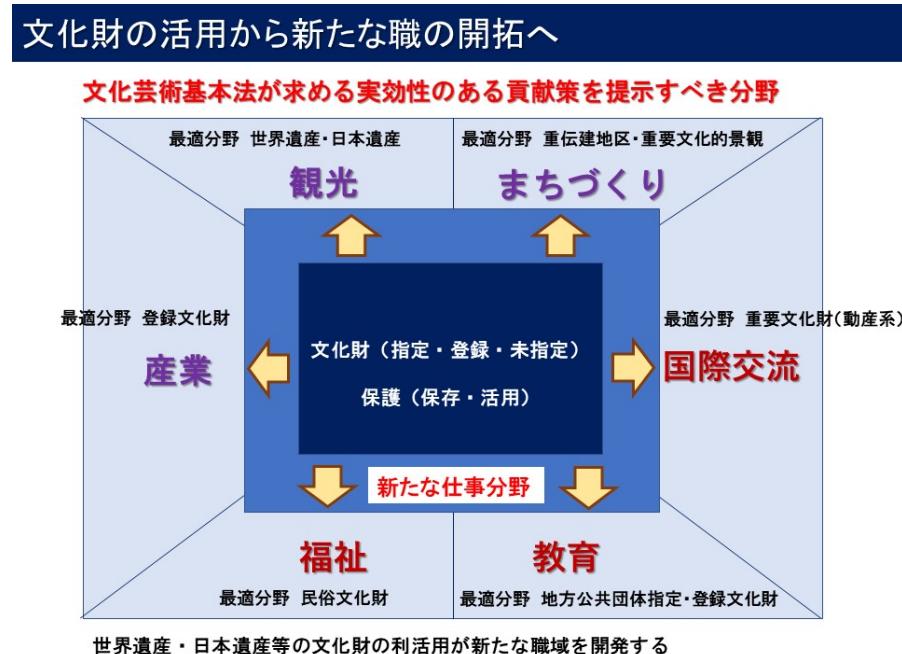
はい。ありがとうございます。非常に興味深い考え方だと思います。福祉の観点と、世界文化遺産をつなげるという発想は、非常に新鮮な考え方と思いました。興味深い考え方だなと思って聞かせていただきました。それでは、次に、下田先生、よろしくお願いします。

(下田)

はい。まちづくり、ひとづくり、それから世界遺産が果たす役割、効果ということで、三つぐらいありましたので、それぞれについてお答えできる範囲でと思います。

まず、まちづくりですけれども、今日、私、古市駅からここまで歩いてくる間に、世界遺産になってどう変わるかな、みたいなことを考えて歩いていたんですが、そうは言っても、まちづくりというものは、一朝一夕になるものじゃないとは思います。先ほど伊藤さんもおっしゃったように、今、日本の人口増加等々に考えても、ピークから減少して、今後、少子高齢化が進んでいくという中で、より長期的に考えて、まちづくりをしていくことが重要だろうと思います。グランドビジョンと言っていいのかわかりませんけども、30年とか50年とか100年後にどうすべきなのか、ということを思い描きながら、それぞれ5年10年単位で更新して修正していくながら、未来を描いていくこと必要だと思います。

中村さんが先ほどウィーンの事例を紹介されて、番号が振ってあって、これだけ建ってしま



つているんだからいいじゃないかって、面白いなと思ったんですけれども。景観の観点からいようと、景観のガイドラインは、よく調和すること、現状の何かスカイラインに調和しなさい、とか、色を調和させなさい、デザインを調和させなさい、と言うんですけども、現状の景観は少しずつ蓄積されていくって、変わるんですよね。ですので、少しずつ切り崩されていくて、調和する環境自体が変わっていくと思います。ですので、30年、50年かけて調和するものが、どんどん良くなっていく、ということを目指して欲しいし、その目標は何なのか、古墳のあるまちというのは、どういうデザインを目指すべきなのかということを、議論していくということが必要だうなと思います。

それと、もうちょっと短期的なということで申しますと、明確に動線、ウォーキングマップとかでありますので、あると思うんですけども、魅力的な複数のストーリーがあって、何回もリピートしてくれて、初心者向けだと、^{くろうと}玄人向けだと、こういったことに関心があるといった、いろんなストーリーを作っていてもらって、それらストーリーの中でいろんな仕掛けを組み込んでいってもらえたらしいのかなと思います。スマホを利用したりとか、いろんなツールもあると思いますし、案内板とともに、駅からここに来るまでにもいくつか古墳を説明する看板があって、ああそうだなあと思ったんですけども、もっと道行く人に伝えていってもいいのかなとか思います。

あとは、そういう動線の中に、拠点となるガイダンス施設、その地域の古墳の、あるいは古墳以外のものも含めてもいいと思うんですけども、そうした施設が羽曳野市にもできてくれるといいだろうなと思います。既存のものもありますけれども、よりよい拠点となるもので、一方的に伝える施設というより、まちづくりにも一役^{にな}担ってもらえるような施設ができるといいかなと思います。

それと、ひとづくりというところでいきますと、先ほどもちょっと復元のところでお話しましたけども、地域住民が決定に参加する仕組みが必要かと思います。ただそうは言っても、「じゃあ、意見出してください」と言われたって、皆さん、わからないというのが実情だと思いますので、行政側がちゃんと説明をして、選択肢を設けることが必要だと思います。「この選択肢だと、こういうメリットがあるけど、こういう限定限界があって難しさもありますよ」といった選択肢に関する説明も必要だと思います。それをしっかりとわかって、いい面、悪い面もわかった上で、住民の人に考えてもらう。専門家だってわからない部分もありながら、取捨選択して判断していると思いますが、そうした作業を住民と一緒にできると良いかと思います。将来的に、そういったことを考えた若い人たち、今の学生なん



パネルディスカッションの様子

かが、経験を通じて意見を提示して参加してくれると思うんですよね。ですので、幅広く、そういう意見を出し示して、選択肢を示して、考えてもらうということが、ひとつくりの上で重要なかなと思います。

あともう一つ、世界遺産が果たす効果、役割について、簡単ではないと思うんですけど、期待したいのは、世界遺産、今、日本で20件になって、それぞれ特定の分野、時代というものを代表するものがそろってきたと思うんですね。ここは、古墳という、日本の歴史区分の中でも、非常に重要な古墳時代を代表する。だけど、日本の古墳を一元化して説明している施設というのがない。それから、その日本の古墳を研究する総合的な拠点施設というのも、おそらくないんじゃないかと思うんですよね。日本は発掘調査を全国でやられていて、各行政が、それぞれの地区内のことを行って、非常に厚い蓄積はあると思うんですけども、それを横断的に見て統括するという見方はまだ弱いのではないか。これは大学の先生方が担っているかもしれないんですけども、先生方も忙しくて、なかなかそれだけにフォーカスして仕事ができない。だから、やっぱり世界遺産になった地域が、例えば、今回縄文が世界遺産なったのなら縄文の地域が、古墳では大阪が、ということで、羽曳野市や大阪府、堺市、藤井寺市の4府市が共同して、ハード面と人を確保して、包括的な日本の古墳研究を担って、その成果を発信しうる施設ができてきたらいいなと、それこそが世界遺産の役割として最も重要な点ではないかなということ思っております。

(伊藤)

ありがとうございます。それでは、時間も少なくなってきたましたが、中村先生も、よろしくお願いします。

(中村)

はい。さっきね、観光とか、それから地域遺産、地域活性化、経済的な問題、ちょっと悪口も言いましたけども、これ実は重要です。要するにバランスの問題です。

共存、いかにこの遺跡を守りつつ、有機的にそれを活用しながら、守っていけるか。そして、それを観光、あるいは、経済的に結びつけられるか、というバランス、共存がうまくいけばとは思いますね。実際、これ研究、経済学上の統計からも、一時的には観光客がどっと来て、経済効果あるんですけども、必ず下がっていくもんなんです。そういうもんですよね、普通は。ですから、それも踏まえた上での、どうバランスをとりながら、共存していけるか。地域活性化、あるいは経済的な観光化と、残すことは、共存していけるか。これが、今のSDGsにもかなう話、かなうことになるんではないのかと思います。これは、京都であった、京都會議での京都ビジョンでも、確かに書かれてあったと思いますし、バランスが問題だと思いますよ。それを皆さんで考えていきましょう。

(伊藤)

はい、ありがとうございます。最後の話題は、本当に興味や関心をもって、もっともっと議論したいんですけども、時間のほうが来てしまって、非常に残念です。各先生方のご提案といいますか、ご意見いただいた内容は、非常に重要なことだと思います。これから、できたら私ども行政のほうもそうすけれども、皆さんですね、住民の皆さん、あるいは関心を持っていただける皆さん、あるいはサポーターとして、いつも励ましていただいている皆さんと一緒に、考えていくことができたらいいなと思っております。



伊藤 聖浩

今日のシンポジウムは、その糸口といいますか、入口といいますか、そのきっかけになったらいいなと思っています。なかなか解答は難しいものがあって、たどり着くのが困難かもしれませんけれども、世界遺産の保存、次世代への継承、これにかかる活用のことに関心をもってやっていこうと考えています。引き続き、皆さんのご協力、ご理解、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。それでは、パネルディスカッションを終わりに…

(下田)

すみません、終わったところで、ちょっと申し訳ありません。一言だけちょっと言い忘れたといいますか、お伝えしたいことがあるのですが。ひとつくりのところで。

今日、たくさん来ていただき、ありがとうございます。ただ、やっぱり年配の方が多いということがあって、やっぱり、ひとつくりの上で、若い人、次世代の方々がいかに保存に携わっているのかというのが、世界遺産にとって非常に重要だと思います。ですので、皆さん、ここに来られている方、皆さん、今日聞いた話をお孫さんにぜひ伝えていただいて、ぜひお孫さんと一緒に古墳に行っていただけたらなと思います。

(伊藤)

ありがとうございます。何分不慣れで、進行がうまく進まなかったところ多々ありがとうございましたが、どうかご容赦いただきたいと思います。今日ご参加いただきました会場の皆さん、長時間にわたりありがとうございました。先生方も、ありがとうございました。これをもちまして、パネルディスカッションを終わりたいと思います。